6/6　民数記 13：30-14：12「主が私たちとともにおられる」

小池宏明牧師

奴隷の地、エジプトから救い出されて、約束の地へ向かう主の民の歩みをたどっていく。主は民を導き、守り、育み、いよいよ、約束の地カナンの南に広がるパランの荒野にまでやって来た。主は 12 部族から 12 名を選んで、40 日間のカナン偵察に行くように命じる。偵察隊は、カナンの先住民のこと、土地のこと、食べ物のことなどを見て来たまま報告した。しかし、これをどのように評価するのかが問題だ。

＊悪く言いふらす 10 人と信仰をもって発言する 2 人

偵察隊 12 人の内 10 人が、人々に、悪く言いふらした。彼らが恐れたのは、その土地ではなくて、そこに住む人々であった。「カナンに住む民は背が高くて、強くて、私たちが食い尽くされてしまう、自分たちがまるでバッタのように見えました。」（13:31-33）彼らは、恐れのあまり、事実と異なることを言いふらした。これを聞いたイスラエルの人々は、新しいリーダーを立てて、エジプトに戻ろうと言い出す始末だ。イスラエルの民は、困難に直面すると、いとも簡単に主の約束を忘れて悲観してしまうのだ。

偵察隊の内ヨシュアとカレブは勇敢に、主に背いてはならない、主が私たちとともにおられる、主の約束を信じて前進しよう、と発言した。（14:6-9）しかし、全会衆は、二人を石で打ち殺そうと言い出したのだ。ところが、主が二人を守られた。そして、主なる神様は、不平を言った者たちの中で、二十歳以上の者たちが約束の地に入ることを許さず、40 年の間荒野をさ迷わせるとのさばきを下された。

＊主が共におられるのに

私たちは「主が共におられる」、「私たち主の民と、主がいつも一緒に居て下さる」と何度も、何度も、語ってきたし、聞いてきた。しかし、本当の意味で「主が共にいて下さる」、「主が共に歩んでいてくださる」と私たちは信じて、行動しているだろうか？私たちは、頭で分かっていても、困難なことが起きると、すっかり主なる神様のことを忘れたかのように行動してしまいがちなのだ。何十年信仰生活を送って来ても、一瞬にして不信仰に陥ることがある。主は憐れみ深いお方であるから、立ち返る者に赦しを与えて下さるが、不信仰のために引き受けなければならない責めもあるだろう。長い間の回り道や荒野での生活を強いられるかもしれない。人を恐れず主を畏れて主に信頼して歩む道が、まことに祝福された道だ。「主が共におられる」という当たり前のことを、本当に当たり前のこととして生きる主の民、キリストの群れでありたい。